

4 家族の支え

再発も姉の提供で克服

「徳子は今、高校生活が楽しくて仕方ないんですよ」。三瓶徳子さん（^五）いわき市、高校一年生の母千鶴子さん（^五）は目を細める。長年の闘病、二度にわたる骨髄移植など、徳子さんには幾度となく困難な問題が起きたが、一家が団結して立ち向かい、支えあっていたからだ。

三瓶家の四女・徳子さんが白血病を発病したのは一九九〇（平成二）年、小学校一年生の時だった。二年間にわたって治療を受けたが、退院を目前にして再発してしまう。

しかし、発足したての日本骨髄バンクの存在が幸いした。徳子さんとHLA（白血球の型）が合う骨髄提供者が見つかり、一九九三（平成五）年五月に茨城県立こども病院で移植を受けることができたからだ。父忠治さん（^五）や千鶴子さんによると、同バンクによる非血縁者間移植は全国で四例目、同病院では初めてだったという。

とはいえ、移植まで順調に進んだわけではない。直前に、患者登録したバンクの専門医から「徳子さんのHLAが不自然」と指摘さ

れたからだ。

最初の検査が誤っていたからだ。つたが「あのまま移植してもうまくいかなかったし、HLAの合うドナーを待ち続けて悪い状態になっていたかもしれない」と忠治さんは打ち明ける。

以来、三瓶さん夫妻は徳子さんを救いたい一心でさまざまな治療方法について懸命に勉強を続けた。茨城県立こども病院では医師によ

る治療に関する説明が患者や親にも行われ、三瓶さん夫妻にも役に立った。ドナーが見つかった約半年後、移植手術は無事成功した。

三瓶さん一家は「ドナー登録者が増えてほしい」といういわずな願いのもとに、公共広告機構のCMに出ることに応じ、入院中と退院後の徳子さんの撮影が行われた。

全国放送となったが、突然、治療で髪が抜けた徳子さんの姿が別



徳子さんの友人が移植の成功を折って折った千羽鶴。現在も徳子さんの自宅に飾られている。

「ドナー登録」アピールへCM出演

のシーンに差し替えられた。「私の子どもがCMを見て、自分も同じ病気だと知ってしまう」という声が寄せられたからだという。

医師や両親からの告知を受け、徳子さんはなぜ髪が抜ける治療を受けるのかを理解し、納得していた。しかし、一家の協力とは別のところで、問題や議論が起きていた。

移植から二年十カ月。今度は再発という衝撃が一家を襲う。卒業式を目前にして予行演習が続いた六年生の二月のことだった。再び入院。忠治さんは「跳び箱や鉄棒もできたと、うれしい毎日でした。再発と聞いて目の前が真っ暗になりました」と当時の戸惑いを語る。

徳子さんとHLAが完全一致する家族、親族はいない。ただ、四人姉妹の長女の睦さんとはHLAが一つだけ合わない「ワンローカルミスマッチ」。一刻を争う状態で睦さんからの移植が行われた。

祈るような家族の気持ちを通じたのか、この移植手術も成功に及んだ。困難な日々をともに乗り切ってきただけに、徳子さんの笑顔はまた、家族の喜びにも重なる。